



陵陽

令和元年(2019年)11月6日(水) 第7号



“陵陽っ子”ファーストの学校づくりに寄せて



校長 高橋 利幸

私が最近注目している世の中の出来事は、国際オリンピック委員会（IOC）の理事会が、来年、東京2020オリンピック・パラリンピックのマラソンと競歩の2種競技を、突然、東京都から札幌市へ移すことを決めたことです。

東京都や日本オリンピック委員会によるオリンピックの開催準備は、多額の費用と一つ一つの競技の特性を踏まえて、「アスリートファースト」の精神で進めてきたはずですが。ここ最近のオリンピックの開催には、「競技場の完成が開催日に間にあわないかもしれない・・・」、「資金不足により・・・」など、どうして候補地として自ら手をあげるんだらうと疑問に思うことが多くありました。しかし、東京オリンピックに関しては、一切そのような報道を耳にしたことはありません。「おもてなし・・・」で日本の心を伝え、一丸となって開催地を勝ち取った東京都民にとって、花形と言われるマラソン・競歩が突然変更されたことは、到底、納得できることではないと思います。

変更の理由は、「アスリートの健康が最優先事項」とIOCバハ会長は述べています。しかし、このアスリートファーストという選手の何を優先するのかという考え方が、このたびの出来事の中で重視されなければならないと、様々なところで議論されていたのです。「選手は東京を走りたかった、数年前から何度も東京のコースを訪れ作戦を練っていた、暑さ対策として科学的根拠をもとにドリンクの中味を検討してきた、予想される高温多湿の中で毎日〇〇キロも走ってトレーニングを重ねてきた・・・」という出場選手や競技スタッフの思い。一方で、環境面では、スタート時間の設定や熱を反射しないアスファルトの開発、ミストと言われる空気を冷やす冷水の霧状シャワーを設置したり、選手の健康を守るための医療体制、多数のボランティアによるゴミの管理や見学場所の整備なども配慮されていたのです。

札幌市にとっては、成功して当たり前。失敗したら冬季オリンピックの立候補を見据えて準備を進めているこれまでの努力が一瞬のうちに「水の泡」となりかねません。札幌市民ができる「おもてなし」をたとえ準備期間が短くとも、選手にとって最高の舞台をつくる協力が必要ではないでしょうか。本校の生徒たちにも、世界の名だたる選手たちが市内を駆け抜けるスピードや表情、この日のために練習を積み上げてきた勝利に向ける熱い気持ちと選手の鍛え抜かれた走り方を、声をからして応援し、本物に触れる学びを経験させてあげられることが本当に楽しみです。

一連の騒動の中で考えたことは、「陵陽っ子ファースト」って何かということです。毎日の学校生活の中で、たくさんの生徒が学習や様々な活動に頑張ってくれています。学校自体が、とりわけ毎日開催されている「ミニ・オリンピック」です。順位よりも、一つの授業の学びの深さから、新たな発見や希望、夢に繋がり、目標に向かって努力をかさね、失敗をしたり、経験したりするところです。さらに、地域にとっての「学びの場」としても、ご活用いただいたり、学校行事や授業参観を通して生徒を育むためにご協力を賜る会場でもあります。生徒たちにとって、本校で学ぶ3年間は、あつという間です。これからも陵陽中が、「陵陽っ子ファースト」となる学校をめざしていきたいと思っています。